

震災25年「語り継ぐ学校防災」 ～その時学校では何が起こっていたのか～

兵庫県立大学学生災害復興支援団体 LAN (Leaders' Active Network)

1. 事業の概要

学校等の現場で、阪神・淡路大震災を経験した教職員に聞き取り調査を行い、当時学校等で起こっていたこと、避難所運営への関わり、学校再開に向けての状況を明らかにし、災害時の学校のあるべき姿を体系づける。

2. 神戸市教員へのインタビュー

(1) インタビュー実施の流れ

- ①西宮市で震災を経験した教員への事前インタビューにより、質問項目を作成。
- ②2019年10月19日と26日の2日間にわたりフォーラムを開催し、震災当時、神戸市の小学校、中学校で教員をさえていた方々を講師として招待。
- ③プロジェクトメンバーで各ブースに分かれインタビューを実施し、その様子を映像で記録。
- ④②③とは別の方々のご自宅、職場に訪問し、インタビューを実施し、その様子を映像で記録。



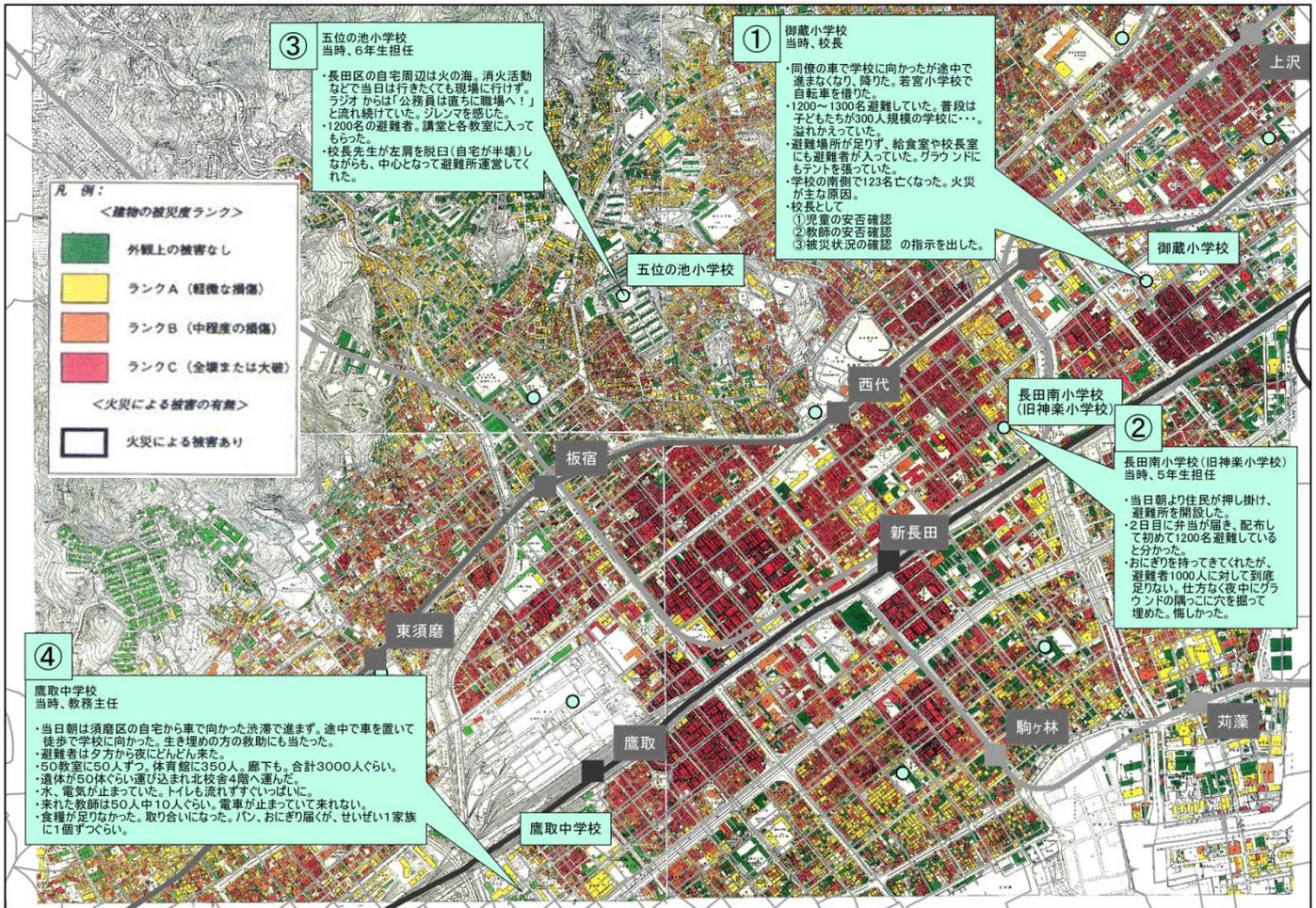
(2) インタビューの詳細

半構造化面接法でインタビューを実施した。以下に、質問項目を示す。

インタビュー質問項目	「学校で起こった事実をありのままに語っていただき、記録に残す」
I	当時の「 <u>発災から学校再開まで</u> 」を時系列で語っていただきますでしょうか。+
	1 ご自宅の被害状況は。(例：家の中/全壊・半壊・一部損壊)+
	2 周辺の被害状況は。(例：家屋/火災/交通)+
	3 初めて学校に行かれたのはいつか。(例：直後/当日の午後/数日後)+
	4 教職員の参集率は。+
	5 学校での業務、役割は。詳しく。(例：復旧作業/安否確認/避難所開設/避難所運営/当直/救援物資)
	6 避難所開設、運営について。詳しく。+
	7 トイレの状況。+
	8 水、食料の状況。+
	9 連絡手段は。(電話、伝言板 等のキーワードが予想される)+
	10 児童生徒の様子、動き+
	11 学校再開に向けて。再開時の様子。+
II	その他、お話の中に出てこなかったキーワードについてお聴きする。+
	【キーワード】+
	自宅の被害/学校の被害/参集率/役割/安否確認/避難所開設/避難所運営/+
	当直/救援物資/トイレ/水/食料/連絡手段(電話、伝言板など)/安置所/+
	ボランティア/学校再開/児童生徒の動き(避難所、家庭、地域、再開時)+
III	「 <u>25年経つ今だから言えるここだけの話</u> 」を語っていただきますでしょうか。+

3. 現場で起こった現実と被災地図（神戸市長田区）

この地図は、震災直後、きわめて早い時期に阪神間の都市計画関係者が、被災地の現状把握がまずは重要であるとの認識から、千人以上がかかわって作成された被災地の地図である。当時の教員の皆様の語りを、より効果的に語り継ぐ方法の1つとして、当時の被災地図と語りを重ね合わせることを試みた。



この手法は、フォーラムの1日目にインタビューを実施したプロジェクトメンバーとインタビューを受けた教員から「地図がある方が分かりやすい（語りやすい）」という意見が出たことがきっかけである。2日目のフォーラムは地図を活用して語っていただき、非常に好評であった。

4. まとめ

阪神・淡路大震災で当時の学校では何が起っていたのか。その事実を明らかにすることを目的にインタビューを行ったのだが、それ以上に2つの大きな収穫があった。1つ目は、地図情報を語りに加えることで当時の現場を想像しやすくなるということだ。被災地図をもとに語ることで当時の記憶がよみがえりやすくなり、聞き手の想像力を掻き立てるのに大きな効果があった。本プロジェクトの当初の目的を達成させるために大きなヒントとなり得るだろう。2つ目はインタビューこそが防災教育になり得るということだ。被災前の生徒にできることを明らかにする、という1つの目的があった。当初は得られた語りの中からそれを探ろうと考えていたのだが、インタビューをするということ自体に大きな意味があったのだ。ただ語りを聞くのではなく、インタビューアーになることで、主体的に、そして能動的に語りを聴くメンバーの姿がそこにはあった。震災を経験していないからこそ、主体性を持つことは大変重要であると同時に、強みでもあると言える。

まだこのプロジェクトは道半ばである。語られた事実をもとに、学校防災マニュアルの課題を見だし、マニュアルだけではまかなえないことは何か、被災後から教育再開時に迫られる判断を明らかにしたい。また、当時大きな役割を果たした児童・生徒の姿から、今児童・生徒にどのような取り組みができるかを体系づけたい。